



Title	タテ [縦] ・ヨコ [横] とその周辺
Author(s)	蜂矢, 真郷
Citation	語文. 2004, 86, p. 9-20
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/69071">https://hdl.handle.net/11094/69071</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# タテ「縦」・ヨコ「横」とその周辺

蜂 矢 真 鄉

慶元年点・大坪併治氏积文

タテ「楯」(記応神・四二)の例は、乙女(歌謡の前の本文によるならば「矢河枝比賣」)の形容で、「後ろ姿はまっすぐで、楯のようだ。」(土橋寛氏『古代歌謡全注釈古事記編』)のような意であり、タテは楯の意に用いられている。

タテ「縦」(石山寺藏大智度論天慶元年点)の例について、大坪氏は「天の衣」とされていて、本来「天の衣に」とあるべき箇所かと見られる。また、この例には「經緯」とあって、タテとヌキとが対義的に用いられる例であり、タテ「経」は織糸の縦糸を、ヌキ「緯」は織糸の横糸を表すが、タテ「縦」はタテ「縦」の一種ととらえられる。

ヌキ「緯」「機(略)說文云緯(略)和名沼岐謂一則經可知橫織絲也」(和名抄・廿卷本十四)は、「時代別国語大辞典上代編」

(以下『上代編』と示す)に「織糸の横糸。」【考】貫クの名詞形であるう。(略)とあるように、ヌキ「抜」「大太刀を垂れ佩きタテ「縦」天の衣と經緯有ること无し(石山寺藏大智度論天

現代語においてタテ「縦」・ヨコ「横」がそれぞれ何を表すかについては、國廣哲彌氏編『ことばの意味3 辞書に書いてないこと』の「タテ・ヨコ」、岩野靖則氏(「タテ・ヨコの基本的意義」、久島茂氏『物』と『場所』の対立 知覚語彙の意味体系)が述べられ、また、上代・近世のタテ「縦」・ヨコ「横」について、岩野氏(「タテ・ヨコの成立」)が述べられる。本稿は、それら、とりわけ岩野氏(2)をも参照しつつ、上代・中古を中心とするタテ「縦」・ヨコ「横」およびその周辺の語について見ることにしたい。

—

最初にタテの例を挙げるが、タテ「楯」とタテ「縦」とがある。タテ「楯」……木幡の道に逢はしし娘子後手は小楯るかも  
〔袁陁昌呂迦母〕歯並みは椎菱なす……(記応神・四二)  
タテ「縦」天の衣と經緯有ること无し(石山寺藏大智度論天

立ちて拔かずとも、農智儒登慕未果たしても鬪はむとぞ思ふ」（武烈前紀・八九）・「貫」「橘は己が枝々生れゝども玉に貫く時〔隨麻爾農矩騰岐〕同じ緒に貫く〔於野兒弘備農俱〕」（天智紀・一二五）の居体言ととらえられる。すなわち、タテ「経」（織糸の縦糸）に対して、ヌキ「縛」（織糸の横糸）は、縦糸の間にヒ「棧」「杼（通俗文云受し縛曰等今案杼字也和名比）」（和名抄・廿卷本十四）を用いてヌク「拔・貫」ところの横糸であつて、それ故にヌキと言つて考えられる。ヌク「拔・貫」は、引き抜く意〔拔〕にも貫く意〔貫〕にも用いられるが、ヌキ「縛」は貫く意に対応すると言える。

一方、タテ「楯・縦」に対して、タタシの形で用いられる例もある。タタシは被覆形と、タテは露出形と呼ばれる。

タタナミ「盾列」若帶日子天皇坐〔近淡海之志賀高穴穗宮〕（二）治〔天下〕也（略）御陵在〔沙紀之多他那美〕也（記成務）天皇崩明年秋九月壬辰朔丁酉葬〔千倭國狹城盾列陵〕（盾列此云仲哀前紀）

右の「若帶日子天皇」（記成務）および「天皇」（仲哀前紀）は成務天皇を指していく、成務陵がサキノタタナミ「佐紀盾列」にあると記されている。タタナミ「盾列」は、楯が並んでいるさまを表すかと見られる。因みに、「陵」はミサザキと訓まれる。<sup>(1)</sup>

タタナメテ「枕詞」楯並めて〔多く那米云〕伊那佐の山の木の間よもい行き目守らひ……（記神武・一四）

タタナメテは、「枕詞。楯を並べ連ねて弓を射るの意で、地名

の伊那佐・泉ノ川などのイの音にかかる。」（『上代編』）とされる。タタナミ「盾列」のナミは横に並ぶ意のナム「四段」「…浜も狭に後れ並み居て〔後奈美居而〕…」（萬一七八〇）の連用形と、タタナメテ「枕詞」のナメは横に並べる意のナム「下二段」「：友並めて〔友名目而〕遊ばむものを馬並めて〔馬名目而〕行かまし里を…」（萬九四八）の連用形と見られるので、これらからタタナム「四段・下一段」が想定される。

タタサ 縦さにも〔多く佐尔毛〕かにも横さも奴とそ我はありける主の殿戸に〔萬四一二二〕<sup>(4)五五</sup>タタサマ「縦さにも」の殿戸に又太々佐万（新撰字鏡・享和本）

## 和本)

タタサマ（新撰字鏡・享和本）の例は、モムノキの訓に当たる「縦」字とタタサマの訓に当たる「縦」字とが混同されたものである。タタサ・タタサマについては、第一節に改めて見る。

これら被覆形タテ「楯」に対応し、タタサ・タタサマは露出形タテ「縦」に対応するものである。

## 二

次に、ヨコ「横」の例を挙げる。

ヨコサラフ「横去」……百伝ふ角鹿の蟹横去らふ（余計佐良布）何處に至る……（記応神・四二）

モモヅタフは枕詞かと見られる。ツヌガ「都奴賀能迦述」は、

現福井県敦賀市に当たる。ツルガ「越前之都魯鹿津」（靈異記・中廿四）・「敦賀我留」（和名抄・元和古活字本、越前国郡名）とあり、ツヌガーツルガはナ行一ラ行の子音交替と見られる。サラフはサル「去」十フ（反復・継続）ととらえられて、ヨコサラフは横に去り続ける意と見られる。

ヨコホル ひんがしのかたに、やまのよこぼれるをみて（土左日記）

ヨコホルは、諸説があるが、横に広がる意かと見られ、そのホルは、広いさまを表すホラホラ「鼠來云 内者富良々以四字外者須々夫々此四字」（記神代）とともにとらえられるかと見られる。

ヨコタフ 欲す以琴聲にて使を悟じ於天皇に横琴を弾て  
曰（雄略紀十二年十月・前田本）

ヨコタハル【四段】横たはれる松の木高きほどにはあらぬに（源氏物語・藤裏葉）・【下一段】おほきなる木の、風に吹きたうされて、根をさゝげ横たはれふせる（枕草子）

ヨコタフは下二段動詞でよこたえる意であり、ヨコタハルはよこたわる意であるが四段動詞・下二段動詞両方の例が見える。このタフが何であるかは明らかでない。

ヨコヤマ「横山」妹をこそ相見に来しか眉引の横山辺ろの（与許夜麻敝呂能）猪鹿なす思へる（萬三五二二）・東歌（ヨコギ「横木」枕与己木又方久良（新撰字鏡）は紫壇、横木には沈（宇津保物語・吹上下）

ヨコガミ「軸」軸（略）与己加弥也（新撰字鏡）

### ヨコハキ「横佩」 伏突与己波支（同）

ヨコヤマ「横山」は、「起伏少なくなだらかに、横に長くつなった山。」（『上代編』）の意とされる。ヨコギについて、「桃」字（新撰字鏡）は大棗の意であるのでその点ははつきりしないが、横にした木の意と見てよいであろう。宇津保物語の例は、タテギ「縦木」と対義的に用いられている。ヨコガミは、車軸の意とされる。ヨコハキは、太刀の異称で、身体の横に佩くところから横佩と言ふとされる。

ヨコサ 縱さにもかにも横さも〈加尔母与己佐母〉奴とそ我  
はありける主の殿戸に（萬四一三三）

ヨコサマ 伊字の三の點の、若（し）並ハ横也』（にし）ても則（ち）伊に成（ら）不、縦（にし）ても亦成（ら）不、

（石山寺藏法華經玄贊平安中期点・中田祝夫氏釈文）まるは、目はたゝさまにつき（略）鼻は横さまなりとも（枕草

子）  
ヨコサ（萬四一二二）の例は、先にタタサの例として挙げたものであり、タタサと対義的に用いられている。タタサ・ヨコサは、縦であるさま、横であるさまを表している。ヨコサマ（石山寺藏法華經玄贊平安中期点・枕草子）の例は、タタサ・ヨコサに用いられていて、タタサ・ヨコサも、縦であるさま、横であるさまを表している。

## ヨキシ（日本書紀私記・甲本）

タテ「縦」・ヨコ「横」についての種々の例をさらに挙げる。

則隔<sup>(1)</sup>山河<sup>(2)</sup>而分<sup>(3)</sup>國縣<sup>(4)</sup>隨<sup>(5)</sup>阡陌<sup>(6)</sup>以定<sup>(7)</sup>邑里<sup>(8)</sup>因以東西為<sup>(9)</sup>日縱<sup>(10)</sup>南北為<sup>(11)</sup>日橫<sup>(12)</sup>山陽曰<sup>(13)</sup>影面<sup>(14)</sup>山陰曰

<sup>(15)</sup>背面<sup>(16)</sup>（成務紀五年九月）

右の「阡陌」「日縱」「日橫」の部分に対する、日本書紀の北

野本（第三類）・熱田本・守晨本・兼右本・寛文九年板本、日本書紀私記の甲本・丙本、和名類聚抄所引日本紀私記の訓を見ると、

「阡陌」：タ、サマヨコサマノミチ（北野本）、タ、サノミチ

ヨコサノミチ（熱田本、守晨本右訓、兼右本右訓、寛文九

年板本右訓）、タチシノミチヨコシノミチ（守晨本左訓、

兼右本左訓、寛文九年板本左訓、和名抄所引日本紀私記

「多知之乃美知、与古之乃美知」、他にタ、サノヲホチ

（日本書紀私記・丙本「太々左乃乎保知」）

「日縱」：ヒノタ、シ（北野本）、ヒタ、シ（熱田本、守晨本、

兼右本右訓、寛文九年板本、日本書紀私記・丙本「日太々

末之」、ヒノタッシ（兼右本左訓「比乃多都志養老」、日

本書紀私記・甲本）

「日橫」：ヒノヨコシ（北野本、兼右本左訓「比乃与己之」、

日本書紀私記・甲本）、ヒヨコシ（熱田本「日橫」、守晨

本、兼右本右訓、寛文九年板本、日本書紀私記・丙本「日

與古之」、他に付訓箇所が「日縱」に誤られているがヒノ

のようであり、第二節に見たタタサ・タタサマ、ヨコサ・ヨコサマを含めてその他に、タタシ・タツシ・タチシ、ヨコシ・ヨキシの訓が見える。「日縱」に対する兼右本左訓ヒノタッシに「養老」とあるところから見ると、「日縱」はヒノタッシと、「日橫」はヒノヨコシと訓むのが本来かとも思われる。

この日本書紀の例において、「日縱」は「東西」を、「日橫」は「南北」を、「影面」は「山陽」すなわち南を、「背面」は「山陰」すなわち北を指していることが注意される。また、カゲトモ「影面」はカゲ「光」+ツ（連体）+オモ「面」の約、ソトモ「背面」はソ「背」+ツ（連体）+オモ「面」の約ととらえられる。<sup>(15)</sup>

……大和の青香具山は日<sup>(16)</sup>の經<sup>(17)</sup>（日經乃）<sup>(18)</sup>大き御門に春山としみさび立てり畝傍<sup>(19)</sup>の瑞山<sup>(20)</sup>は日<sup>(21)</sup>の緯<sup>(22)</sup>（日緯能）<sup>(23)</sup>大き御門に瑞山<sup>(24)</sup>と山さびいます耳成<sup>(25)</sup>の青菅山<sup>(26)</sup>は背面<sup>(27)</sup>の（背友乃）<sup>(28)</sup>大き御門に宜しなへ神さび立てり名ぐはしき吉野の山は影面<sup>(29)</sup>の（影友乃）<sup>(30)</sup>大き御門ゆ雲居にそ遠くありける…：

…（萬五二、藤原宮御井歌）

『校本萬葉集』によると、大矢本の「經」ノ左ニ「タッシ」アリ。とあり、同じく温故堂本・大矢本の「緯」ノ左ニ「ヨクシ」アリ。とあるが、そのように訓むと字余りになるので、ヒノタテノ・ヒノヨコノと訓んでよいと考えられる。ここにヨクシの訓があることには注意しておきたい。

藤原宮から見て、香具山は東に、畝傍山は西に、耳成山は北に、

吉野山は遠く南に見えるので、この例の「〈日經〉」は東を、「〈日緯〉」は西を、「〈背友〉」は北を、「〈影友〉」は南を指していると見られる。『日本国語大辞典』(初版・第2版とも)ヨコ「横」の項は、「南北の方向に対して、東西の方向。」の意として右の萬葉集五二番歌の例を挙げるが、正しくない(タテ「緯・豎・經」の項では、「東。」の意として挙げている)。

日豎 日横 陰面 背面乃諸國 人乎割移天 (高橋氏文)

『上代編』タテ「經・緯」の項の「考」に、「成務紀五年には「以東西為日緯」とあるが、高橋氏文では「日豎・日横・陰面・背面乃諸国人乎割移天」とあり、この四つで四方を表わすらしく、すなわち第一例(蜂矢注、萬五一)の用法と一致する。成務紀の例も、中國で東西を緯、南北を經というのにならつたのであろうが、逆になつてゐる。」とあるように、萬葉集五二番歌の例に倣つて、「日豎」は東を、「日横」は西を、「陰面」は南を、「背面」は北を表すようである。「陰面」は北を表すとも考えられるが、「背面」が北を表すかと見られると、「陰面」は南を表すと見る方がよいであろう。「影面」(成務紀五年九月)・「影友」(萬五一)が南を表しており、「陰面」もともにカゲトモと訓まれるので南を表すということになる。

また、右の『上代編』の指摘のように、「經」は南北、「緯」は東西を表すのが本来であつて、日本書紀成務天皇五年条で、「日緯」が「東西」を、「日横」が「南北」を指しているのには、問題があると言える。<sup>(15)</sup>さらに、「〈日經〉」(萬五一)・「日豎」(高橋

氏文)が東を、「〈日緯〉」(萬五一)・「日横」(高橋氏文)が西を表すのも、本来とずれがあることになる。

さて、これまでに挙げていないものに、

タタシマ 衡従(ヨコシマタタシマ)(名義抄)

ヨコシマ 河の水横逝以流未不駄聊逢霖雨  
海潮逆上而巷里、乘船道路亦泥故羣臣  
共視之決橫一源而通海塞逆一流以全  
田宅。(仁德紀十一年四月・前田本)

がある。タタシマ(名義抄)の例は、ヨコシマタタシマ・ヨコスマタタサマ両訓の例である。タタシマ・ヨコシマは、タタサマ・ヨコサマと同様の意と見られる。

ここに、サ・シ、および、マはいずれも接尾辞と見て、タタサはタタ十サの、タタシはタタ十シの構成と、タタサマはタタサマ(「タタ十サ」+マ)の、タタシマはタタシ十マ(「タタ十サ」+マ)の構成ととらえられ、タツシ・タチシはとりあえずタタシの母音交替と見られて、また、ヨコサはヨコ十サの、ヨコシはヨコナシの構成と、ヨコサマはヨコサ十マ(「ヨコ十サ」+マ)の、ヨコシマはヨコシ十マ(「ヨコナシ」+マ)の構成ととらえられ、ヨクシ・ヨキシはとりあえずヨコシの母音交替と見られる。

ここで、タタサマ・ヨコサマ、タタシマ・ヨコシマのようなくさま・レシマの形のものについて、今少し検討することにしたい。

（サマ・レシマ両形を持つものに、他に次のようなものがある。

サカサマ　さかさまに年もゆかなむとりもあへずすぐるよは  
ひやともにかへると（古今八九六）——サカシマ　太子行

（レシマカシマルワザシ）（安康前紀・図書寮本）  
（レシマ）  
カクサマ　世間の常の理かくさまに〈可久左麻尔〉なり來

にけらしすゑし種から（萬三七六一）——カクシマ　父我加  
久斯麻在止念豆於母夫氣教禪事（二三詔・続紀天平勝宝元  
年）

コトサマ　むかし、をとこ、ねむごろにいひちぎりける女の、

ことさまになりにければ（伊勢物語）——コトシマ　供奉政  
乃趣異志麻尔在尔（六四詔・正倉院文書・天平勝宝九年）

アカラサマ　努々力々、急須應じ斬。（皇極紀四年六月・  
岩崎本平安中期点）——アカラシマ　自（レシマ）火（アカシマ）炎中（アカシマ）白狗

（アカシマ）出逐（アカシマ）大樹臣（アカシマ）（雄略紀十三年八月・前田本）

これら、レシマとレシマとは、基本的に同様の意と見られる。  
さて、これらレシマ・レシマに対して、サカサを別にすると、

カクサ・コトサ・アカラサの例は見当たらず、サカシ・カクシ・  
コトシ・アカラシの例も見当ならない。<sup>(18)</sup> このことは、タタサマ・

ヨコサマ・タタシマ・ヨコシマに対してもタタサ・ヨコサの例もタ  
タシ・ヨコシの例も見えることと異なっていると言わなければな  
らない。そして、別にしたサカサも、その例は「SAKASA」サカサ

Coll. for sakasama」（和英語林集成・第三版）のように大きく  
下る〔Coll.〕〔口語、Colloquial〕とあることが注意され、サカ  
サの構成と見られる。<sup>(21)</sup>

サマの略かと見られる）ものであって、上代・中古において見る  
ならば、サカサの例は見当たらないことになる。

先に、第三節でタタサマ・ヨコサマはタタサ+マ、ヨコサ+マ  
の構成と、タタシマ・ヨコシマはタタシ+マ、ヨコシ+マの構成  
ととらえられると述べたが、これは、タタサ・ヨコサの例もタタ  
シ・ヨコシの例も見えるのでそのようにとらえることができたの  
であって、右に挙げたレシマ・レシマについてはレサ+マ、レシ  
マの構成ととらえることはできないことになる。

それでは、これらの構成はどうのようを考えればよいか。サカサ  
サマ、カク+サマ、コト+サマ、アカラ+サマ、および、サカ十  
シマ、カク+シマ、コト+シマ、アカラ+シマととらえる。<sup>(19)</sup> すな  
わち、これらのサマをサ+マの肥大した接尾辞と、これらのシマ  
をシ+マの肥大した接尾辞ととらえるのがよいということになる。  
肥大した接尾辞サマの例を他に挙げることができる。

イカサマ　……いかさまに〈何方尔〉思ほしめせか……（萬  
一六七）　いでや、いかさまになすべき（宇津保物語・菊  
の宴）

カリサマ　泛余命執常侍之（泛余加利佐万奈留 執也）（靈異  
記・下序・真福寺本）

がそれである。このうち、イカサマはニを伴いどのようにの意に  
用いられていて、偽物などの意の名詞イカサマはこの時代には見  
えない。これらは、イカサ・カリサの例が見当たらないところか  
ら見て、イカサマ・カリサの構成と見られる。<sup>(20)</sup>

アリサマ いへにいたりて、門かどにいるに、つきあければ、  
いとよくありさまみゆ（土左日記）

## 五

アリサの例が見当たらず、アリサマはアリ十サマの構成と見られるが、サマはさらに名詞サマ「その山のさま、高たかくうるはし」〔竹取物語〕としても用いられて、アリサマ（土左日記）は、名詞として用いられているので、アリ十名詞サマの構成と見る方がよいであろう。

ただ、肥大した接尾辞シマの例は、他に挙げることができないようである。とすると、レナシマの例は、レナサマの例に包摶されることになるので、レナシマの例はレナサマの例からの類推によって形成されたと見る方がよいとも考えられる。

ところで、カス型動詞に本来型（レク+ス）と応用型（レナカス）とがあり、ヤカ型語幹に本来型（レヤナカ）と応用型（レナヤカ）とがあった。<sup>(24)</sup>ここに、これらと同様に、レサナマ、レシナマの構成のものを応用型のものを本来型と、レナサマ、レナシマの構成のものを応用型と呼ぶことができる。ただ、カス型動詞の応用型においては、レナスの例を持つ代入型とそれを持たない直接型とがあり、ヤカ型語幹のそれにおいては、レナカの例を持つ肥大的代入型とそれを持たない直接型などがあつたが、レサマ・レシマにはレナマの例が見当たらないので、そのような分類はできない、ないし、応用型の全てが直接型である、と言える。

ヨコ「横」は、タテ「縱」の対義語として横の意に用いられるが、それとはやや異なり、正しくない意に用いられる例もある。『金剛般若經集驗記古訓考証稿』（辻星児氏担当部分）は、ヨコス「讐」（後掲）について述べられる中で、以下のヨコシ・ヨコメ〔横目〕・ヨコタブ「訐」の他のヨコの例を挙げられる。

ヨコサマ 橫ヨコサマに毀謗を生ぜり。（西大寺藏光明最勝王經平安初期点・春日政治氏积文）

ヨコシ 裂（略）不正也子呼父之稱与己之（新撰字鏡）  
ヨコシマ 罷（略）ヨコシマ穢也耶也（名義抄）

ヨコス「讐」報ヨコセ王崇一 真如所告此是延命大吉（石山寺藏金剛波若經集驗記平安初期点）讐（略）毀也与己須又不久也久（新撰字鏡）……誰か誰かこの事を親にまうよこし申し、〈末字与己之末字之ミ〉……（催馬樂三

○・葦垣）

ヨコメ「横目」町（略）邪見也恨見也与己目尔三留又弥良弥（新撰字鏡）

ヨココト「横辭」垣ヨコばなす人の横言（人之横辭）繁みかも

逢はぬ日まねく月の経ぬらむ……（萬一七九二）

ヨコナマル「訐」方到難波之磯ヨコ會有奔潮太急ヨコ也（七九二）

因以名浪速國ヨコ亦曰浪花今謂難波訐也  
許奈磨盧（神武前紀）

ヨコナマルのナマル【訛】は、やや時代が下るが「あたりける所のきたのかたにこゑなまりたる人の物いひけるをききて」（金葉二度本六九八詞書）のように用いられる。

ヨコナバル「訛」爰新羅の人恒に京城傍耳成山。訛  
傍山<sup>(一)</sup>則「到<sup>(二)</sup>」琴引坂<sup>(一)</sup>て顧<sup>(二)</sup>之曰、宇泥咩巴榔彌<sup>(一)</sup>巴榔<sup>(二)</sup>。ヨコナバル  
是、未<sup>(一)</sup>習<sup>(二)</sup>風俗之言語<sup>(一)</sup>。故訛<sup>(二)</sup>敵傍山<sup>(一)</sup>謂<sup>(二)</sup>宇泥

咩<sup>メ</sup>訛<sup>メシ</sup>耳成山<sup>ナシ</sup>謂<sup>メテ</sup>瀧<sup>タマ</sup>耳。允恭紀四十一年十

月・図書寮本

ヨコナバス「訛」故ニ口ヲ喝メテ音ヲ横ナバシ乞食ノ音ヲ學ブ

(今昔物語集・十四 28)

ヨコナマルとヨコナバルとは、マ行—バ行の子音交替と見られる。また、ヨコナバスは、ヨコナバルの他動詞化ととらえられる。

ヨコタバル [訛] 訛 (略) タガフ カサル アヤマレリ イツハル ヒナフ ウゴカス [訛] ナヨコタハル カマヒスシ (略) (名義抄)

ヨコタブ【訛】さらにくちをゆがめこゑをよこたべて經を  
まねびてよむ（三宝絵詞・中九・東大寺切）

まねびてよむ（三宝絵詞・中九・東大寺切

コタバル（名義抄）の例は、ヨコタバル・ヨコナバル両訓の  
ある。ヨコタバレフタバレハ、タブ「北」[うべ]トサハラム

九二」とともにとらえられる。また三三ナノブ<sup>(2)</sup>（△音物語集）の例とヨコタブ（三宝絵詞）の例とは同話であり、ヨコタブはヨコタバールの他動詞化ととらえられる。

これらの中でも、現代で最もよく用いられるのはヨコシマである。

う。第一・三節において、しサマとレシマとは基本的に同様の意と見る方向で述べてきたが、ヨコサマに対してヨコシマの方が正しくない意に偏る可能性はあるう。そして、サカサマとサカシマアカラサマとアカラシマについても後者がマイナスの意に偏る可能性がないではなく、しサマとレシマとはそのように分化して行つたととらえることもある程度はできそうである。

実は、タテ「縦」はタツ「立」とともに、また、ヨコ「横」はヨク「避」とともにとらえられる。『上代編』ヨコ「横・緯」の項の「考」に「なお、避<sup>ヨ</sup>クはおそらく横<sup>ヨ</sup>と同根、」とあり、「岩波古語辞典」タテ「縦・豎・経」の項に「タテ（立）と同根」と、同ヨコ「横」の項に「ヨキ（避）と同根。」とある。

タツ「立」〔四段〕さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立たちて〔本那迦述多知云〕問ひし君はも（記景行・二四）・「立・建」〔下二段〕この御酒を醸みけむ人はその鼓臼（こづちうす）に立て、（宇須述多云々）……（記仲哀・四〇）  
<sup>(28)</sup>

ヨク [避] [上二段] 家人の使ひにあらし春雨の避くれど我

を「與久礼杼君等乎」濡らさく思へば…」（萬六九七）  
このようにとらえると、第一節に挙げたところのタテ「楯」は  
タツ「立」〔下二段〕の居体言であり、立てる物であることが理  
解される。また、タタはタテ「縱・楯」の被覆形のみならずタツ  
「立」の被覆形でもあり、また、ヨコ「横」はヨク「避」の被覆

形であると見られる。<sup>(29)</sup>

先に第三節でタツシ・タチシはとりあえずタタシの母音交替と見たが、タツシのタツはタツ「立」の終止形、タチシのタチはタツ「立」〔四段〕の連用形でもあり、また、ヨクシ・ヨキシはとりあえずヨコシの母音交替と見たが、ヨクシのヨクはヨク「避」の終止形、ヨキシのヨキは同じく連用形である。右のようにとらえると、タツシ・タチシ、ヨクシ・ヨキシのような母音交替形が見える理由をよりよく説明できることになる。

ところで、ヨコ「横」が正しくない意に用いられる例について、これまでにいくつかの指摘がある。

前掲『金剛般若經集驗記古訓考証稿』(辻氏担当部分)は、ヨコス「讒」を「惡口を言う、中傷する」意とし、「ヨコ「横」が、この語のようにな不正、邪惡を意味した例」として第五節に挙げた例の多くを挙げられ、次のように述べられる。

ところで、漢字「横(略)」は平声ではタテヨコのヨコであるが、去声では「恣也、非理來」の意。つまり勝手氣儘に振まって道理に合わぬことをする意である。従って、右のようない不正の意のヨコは、或いは「横」という漢字の用法の影響によって生じたものかもしれない。

また、前掲『ことばの意味3(略)』の「タテ・ヨコ」は、「絶対用法」としての「タテ<sub>1</sub>「垂直方向」「ヨコ<sub>1</sub>「水平方向」」に対し、「相対用法」としての「タテ<sub>2</sub>「垂直な姿勢の話し手を基準にした前後方向」「ヨコ<sub>2</sub>「水平な姿勢の話し手を基準に

した左右方向」」を考え、「ヨコには〈好ましくない行動〉という含みを持った比喩的用法が多い。」として、「ヨコ取りする」「ヨコ槍を入れる」「ヨコ車を押す」「ヨコ恋慕」「へたのヨコ好き」「話をヨコにそらす」の例を挙げ(この他に「ヨコ紙破り」も挙げられよう)、次のように述べられる。

これはおそらく、人間の進行方向がつねにタテ<sub>2</sub>であるため

に、タテ<sub>2</sub>が〈正常な方向〉というニュアンスを帶びてとらえられているためであろう。

そして、『岩波古語辞典』ヨコ「横」の項には次のようにある。

平面上の中心を、右または左にはずした所、また、その方向の意。また、タテ(垂直)に対して、水平の方向の意。転じて、意識的に中心点に当らないようにする、真実・事実をさける意から、「よこご」と(中傷)」「よこしま(邪惡)」など、故意の不正の意にも用いた。

「絶対用法」のタテが「垂直方向」であるのは、タテ「縦」がタツ「立」とともにとらえられるからと考えられる。また、ヨコが正しくない意にも用いられるのは、『蟹の横這い』のような例を見ると「人間の進行方向がつねにタテ<sub>2</sub>である」ととの関係と言えるが、むしろ、まっすぐに行かず横による(ヨク「避」)ところから、正しくない意にも用いられることになったものであろう。ヨコが正しくない意にも用いられることは、ヨコ「横」をヨク「避」とともにとらえることによってよく説くことができると言える。「漢字の用法の影響」もあるかもしれないが、基本は

和語の側にあるかと思われる。

なお、「石波古語辞典」の言う「意識的に」「故意の」について、  
「好ましくない行動」（傍点、蜂矢）を表すところからするとそ  
のようにも思われるが、「悪口を言う」意のヨコス〔讒〕などは  
確かにそのようでもあるものの、ヨコナマル〔訛〕などはむしろ  
自然と訛るのであって、ヨコ〔横〕の正しくない意のもの全体と  
して「意識的」「故意」とするのは当たっていないと考えられる。

- 注
- (1) [1982・5 平凡社 (平凡社選書<sup>13</sup>)] のち2003・10 同 (平凡社ラ  
イブライ一覧)]
- (2) 「八〇年六月・國廣」と、執筆時期・執筆者が示される。
- (3) 「国語語彙史の研究」4 [1983・5 和泉書院]
- (4) [2001・6 くろしお出版] 第2章、もとと「〈物〉と〈場所〉の量  
の捉え方の統一的理解——〈形態〉と〈方向〉の連関——」(「国  
語学」81 [1995・6])
- (5) 「日本語学」3-3 [1984・3]
- (6) 大坪氏<sup>14</sup>『石山大智度論古点の国語学的研究』上 [2005・7 風間  
書房 大坪併治著作集10] 第一部第二章参照。同<sup>15</sup>「石山寺藏大  
智度論加点経緯考」(「国語・国文」11-1 [1941・1]) には「元慶  
元年」(877) とあるが、「天慶元年」(938) が正しいと見られる。  
『日本国語大辞典』(初版・第二版とも) は「天安」(858) と  
するが、誤りと見られる。
- (7) [1972-1 角川書店]
- (8) 大坪氏<sup>16</sup>「下が未刊のため、同<sup>15</sup>による。表記を通常のもの  
に改めた。」
- (9) 平城宮以北、東方のウワナベ古墳・コナベ古墳・磐之媛陵(佐  
紀ヒシアゲ古墳)・平城陵(市庭古墳・円墳形)・平城宮造営時に  
前方後円墳の前方部が削られた、よって平城陵ではあり得な  
い)・神明野古墳(平城宮造営時に削られ現存せず)・西方の日葉  
酢媛陵(佐紀御陵山古墳)・成務陵(佐紀石塚山古墳)・称德陵  
(佐紀高塚古墳)・神功皇后陵(五社神古墳)、などは、佐紀盾列  
古墳群と呼ばれる。
- 「皇后御年一百歳崩葬<sup>17</sup>于狭城楯列陵<sup>18</sup>也」(記仲哀)・「皇太  
后崩<sup>19</sup>於稚櫻宮<sup>20</sup>」(略) 葬(ハ)狭城盾列陵<sup>21</sup>」(神功紀六十九年四  
月・十月) のように、神功皇后陵もサキノタタナミにあると記さ  
れている。その後、「世人相傳」では、「二楯列山陵」の南が神功  
皇后陵、北が成務陵であったが、神功皇后の崇りがあり、「搜<sup>22</sup>  
檢圖錄<sup>23</sup>」すると、それらは逆であったので改めたら、統日本  
後紀・承和十年四月の記事にある。
- (10) 別稿(「レキとホギ」(「萬葉」150 [1994・5]) 参照。
- (11) ヨコ〔横〕と対応するナム〔四段〕・〔下一段〕に対応して、タテ  
〔縦〕と対応するは、ツラナル〔相與<sup>24</sup>列<sup>25</sup>〕・鹿高原之上<sup>26</sup>」(上  
野淨<sup>27</sup>氏藏漢書楊雄伝天暦二年点・大坪併治氏<sup>28</sup>釈文)・ツラヌ〔各  
自發引<sup>29</sup>〕(石山寺藏金剛波若經集驗記平安初期点) と見られる。
- (12) ヨコボルにはふれていながら、別稿(「対義語ヒロシ・セバン  
との周辺」(「萬葉」104 [1980・8]) 参照)。
- (13) ヨコサノオホチと続けるべきことかと見られる。
- (14) 「末」字があるが、ヒタ・シと見ておくことにする。
- (15) 日本古典文学大系67『日本書紀』上の頭注に、「山の斜面で陽  
の当るのは南側、日かけになるのは北側なので、南を山陽、北を  
山陰という。カゲトモは、「カゲ(光)ツ(の)オモ(面)」の約  
で、日の光の当る方、つまり南方。ソトモは、「ソ(背)ツ(の)  
オモ(面)」の約でその反対、北方をさす。」とあることなど、参

照。

(16) 和名類聚抄には、「大路 唐韵云道路（略）南北曰阡（略）日本紀 私記云多知之乃美知東西曰陌（略）同私記云与古之乃美知」（十巻本三）とある。

(17) アカラサマ・アカラシマは、急に、たちまちの意に用いられる。

『上代編』アカラサマの項の「考」に、「アカラサマニは、アカラメと関係があり、またたきをする瞬間を意味することから、急に、の意となるといわれる。」とある。アカラメ「安加良米佐須如」と事久（五十八詔・続紀天応元年）は、「目をちょっとよそへそらすこと。」（『上代編』）の意に用いられ、アカル「明・赤」「…ふほごもり赤れる娘子（阿伽例蘆塙等咩）いざかば良な」（応神紀・三五）ではなく、アカル「散」外にして諸の人散レテ王子を見（む）るに、「（西大寺藏金光明最勝王經平安初期点・春日政治氏釈文）とともにとらえられるかと見られる。散のように別れる意のアカル「散」は、目をよそへそらす意につながり、「目をちょっとよそへそらすこと」が「急に」の意になるならば、アカラサマ・アカラシマはアカル「散」とともにとらえられることになる。『岩波古語辞典』アカラサマの項には、「アカラはアカレ（散）の古形。（略）（本来の居どころから）ちょっと離れて、あらぬ方へというのが原義。そこから、ついちよつとか、ちょっとかりそめになどの意に転じた」とある。

(18) 痛切である意のアカラシ「懇」（父母懇惻哭悲（懇シカラネタ））（『靈異記・上九・国会図書館本・興福寺本は（懇阿可良側扶太）』）は、別語と見られる。

(19) サカ「堀江より水脈（みずいり）」（美平左香能保流）棍（の音の：）（萬四四六一）、カク「…斯くもがと（迦久母賀登）吾が見し子に…」（記厄神・四二）、コト「則法界に異に（あら）ず〔不〕なり又。」（西大寺藏金光明最勝王經平安初期点・春日政治氏釈文）の例が見

える。アカル「散」の例は、注(17)に挙げた。

(20) 近世に下ると、イカサ「しかし伊之字のいかさへいやだ」（西・富賀川拝見）の例は見えるが、名詞イカサマ「又いかさま國となんいへる所に至れば」（談・風流志道軒伝四）の略と見られる。

(21) イカ「…いかばかり（伊加婆加利）恋しくありけむ…」（萬八七五）、カリ「…旅の仮廬に（多非乃加里保尔）安く寝むかも」（萬三四四八・防人歌）の例が見える。

(22) アリ「…賢し女をありと聞かして（阿理登岐加志四）…」（記神代・二）の例が見える。

(23) 別稿〔「カス型動詞の構成」（吉井義先生古稀記念論集）日本古典の眺望〔1991・5 桜楓社〕参照。

(24) 別稿〔「ヤカ型語幹とラカ型語幹」（国語論究）7 中古語の研究〔1998・12 明治書院〕〕参照。別稿〔「ヤカ型語幹の構成」（ことばと）〕ののは、8〔1991・12〕をも参照。

(25) 東京教育大学大学院中田教授ゼミナル編〔1975・5 私家版〕

(26) ナマル「詫・タブ「詫」を含めて、この節の以下の例については、別稿〔「日本靈異記訓釈」「波リ天」考〕（訓点語と訓点資料）80〔1988・6〕にふれたことがある。

(27) 別稿〔〕に示すように、日本靈異記・上巻十九縁とも同話である。

(28) ヨク「避」はこの例によつては上二段動詞であることが確定できないが、キガ乙類のヨキヂ「避道」「神の崎荒磯も見えず立ちぬいづくゆ行かむ避道はなしに（与奇道者無何）」（萬一二二六）の例と合わせて、上二段動詞であることが確認できる。

(29) 有坂秀世氏「国語にあらはれる一種の母音交替について」（国語音韻史の研究）1944・7 明世堂書店 1957・10 増補新版 三省堂、もと「音声の研究」4〔1931・12〕参照。

(30) 作家立松和平の本名の姓は横松であり（立松和平の著書などの

絵を描く横松桃子は娘)、横山ホット・ブラザーズの弟子に立山センター・オーバー(一九八五年、NHK上方漫才コンテストで優秀賞一組の中に入った)がいる。ともにヨコからタテへの変化であるが、これらに影響関係があったとは考えられず、現代においてもヨコが正しくない意に用いられることからヨコをタテに変えたかとも思われる。尤も、現代語では、ヨコシマを別にすると、ヨコに正しくない意もあることはあまり意識されていないので、これは偶然の可能性もある。センター・オーバーが立山<sup>たてやま</sup>のある富山県の出身であれば事情は変わるが、センターは奈良県の、オーバーは大阪府の出身である。ただ、センターの趣味は登山だそうで、その辺に「立山」になる理由の一つがあるかもしれない。

なお、上座の意の「横座」は、ヨコが正しくない意とはむしろ逆のプラスの意味に用いられる例であるが、畳や敷物を横に敷くところからそのように言うものである。

—本学大学院教授—